

「三里の渡し」と「七里の渡し」

西羽 晃

2020年6月9日付けの『中日新聞』夕刊に「**七里の渡し 不人気ルート？ 江戸期の旅 急がず回れ**」との記事が載りました。この見出しは少々大袈裟すぎると思いますが。記事にあるごとく、江戸時代に東から来る物見遊山の団体客は津島神社に参り、「三里の渡し」を通過して、「七里の渡し」を通らない場合が断然に多いのですが、急ぎの私用や商用の旅は違います。



当時の団体客は伊勢参りツアーが主でしたが、ついでに奈良から京都、場合によっては四国の金毘羅さんにも足をのばしています。そのツアーを采配したのが伊勢の御師（おんし）たちです。一生に一度の旅ですから、できるだけ多くの名所旧跡を廻るプランが用意されました。御師の手代（従業員）は各地の村々を訪ねて誘客活動をしています。そして伊勢では自前の宿に泊めて接待しました。

同じような御師（おし）は幕末の津島にも30軒もあり、誘客活動をしています。そのため伊勢参りのついでに津島神社にも寄るようになったのは津島御師の努力の結果だと思います。現在では津島御師の家は氷室作太夫家のみが残っています（写真）。



団体であっても公的な大名行列などは「七里の渡し」を通るのが主で、「三里の渡し」は渡船の数や、佐屋路の宿場などは大量の通行に対応できる設備が十分でなかったからです。しかし幕末・明治初期には予定を優先するため、天候の影響が少ない「三里の渡し」が将軍や天皇などに使われるようになりました。

江戸時代初期に「七里の渡し」を通った大名行列の最大は御三家の紀州藩です。最初のころは宮（熱田）から船で伊勢湾沿岸の白子や松坂（いずれも紀州領）へ渡るか、桑名への「七里の渡し」を使用しました。どのルートも松坂からは紀見峠を経て紀伊半島を横断する山岳コースで、険しい山路を通るし、本陣や宿屋などの設備も充分でなく、元禄 14（1701）年からは和歌山から大坂へ出て、京都から東海道を通るようになりました。この年 5 月 17 日に紀州藩主徳川綱教は東海道上山宿土山本陣に宿泊し、(『東海道上山宿本陣 土山家宿帳調査報告書』2009 年 甲賀市教育委員会)、その 3 日後の 20 日に四日市宿清水本陣に泊まっています。正徳 2（1711）年 11 月 5 日には紀州藩主徳川吉宗が四日市宿清水本陣に宿泊しています(『東海道四日市宿本陣の基礎的研究』2001 年 岩田書院)。

享保 19（1734）年から美濃路（中山道垂井宿から東海道宮宿）を通るようになり(『尾西市史資料 起宿交通編』1975 年 尾西市教育委員会)、「七里の渡し」を通らなくなりましたが、たまには東海道伊勢路回りも通ることもあったようです。